

第四コーナーからのご挨拶

以下の挨拶文は、去る 1 月 24 日(金)に小野記念講堂で行なわれたシンポジウム(科学と技術で紐解くイスラーム世界)のコンクルーディング・リマークスにおいて、筆者(北村)が主催者として謝辞を述べた際に、併せて、最終講義的な挨拶を行なった内容である。参加者には以下の内容をコピーして配布したが、北村のスピーチはその中の主要な部分にとどまっている。

本日のシンポジウムの締め(省略)と併せて、私事で恐縮ですが、この 3 月に内・外の公務を離れることになりますので、併せてご挨拶をさせていただきます。

人生第四コーナーの立場から

私事になりますが、私は、この春に引退します。公務員(官僚)の 30 年余と教員(教授)の 14 年余の人生、計 45 年。自分で言うのも可笑しいですが、「世のため人のため」に努力してきました。さまざまな経験を活かすことのできた早稲田大学、特にアジア太平洋研究科の環境に深く感謝しています。また、この間、20 歳前と違って、健康に恵まれたことも幸運でした。しかし、いつも仕事を優先したので、家族をあまり顧みることをしませんでした。子供は親の背中を見て育つと言いますが、3 人の息子は、私がほとんど家にいなかったのも、私の背中をあまり見ることもなく母親中心に勝手に育ったのではないかという気がします。

官僚としては、法律、協定、予算等を抱えた行政、内外の交渉。中央・東南アジア等への政策支援。大学ではこの早稲田大学から約 100 人の修士と博士を送り出し、著書・論文もおそらく平均以上のものを書くことができたと思います。他の教員よりも厳しめに学生を教育しましたので、いつも怖がられる存在なのかなという自責の念を持っていましたが、一昨年(2012 年)秋にジャカルタの会議に参加したところ、7 人の卒業生全員がホテルに訪ねてきてくれ、また、一人はオーストラリアから歓迎の国際電話をくれました。そして目を見張り心を打たれたのは、全員がインドネシアを背負うしっかりした社会人としての姿だったことです。早稲田大学の国際情報通信研究科でお世話になった教授が「どんな学生でも将来の可能性を考えれば可愛いものですよ。」と話してくれたことを思い出しました。

そして、この 7 年余りは、早稲田大学(国際学術院アジア太平洋研究科 <<http://www.waseda.jp/gsap/>>)と国際委員会(今日の国際会計・監査基準の先端問題を議論する「公益監視委員会」、PIOB <<http://www.ipiob.org/>>)の二足の草鞋。常勤の大学をおろそかにできず、土日・祭日無しの 7 年余でした。

そういう生活でしたが、今振り返ってみると、公務員(リーダー的な役割を果たす公務員という意味で以下では官僚、ジェネラリストと表現します)と教員(教育研究に携わるという意味で教授、スペシャリストと同義に使います)の生活について幾つか感じるがありました。単純化した比較と

お話は反って誤解を生ずる恐れがありますが、あえて申し上げます：

1. 相違と近似

- (1) まずは、下世話の話から：比較的地味な服装という意味では、政府（役所）も大学も同じ。官僚の世界は、ダーク・スーツが主流。これに比べ、大学の教員は、服装を見る限りてんでバラバラ。強いて言えば、カジュアルなジャケット姿、そして意外にセーターとジャケットの肘あてが特徴かもしれません。

役所では、外部に出向していた官僚が戻ってきた時に、上司から「髭くらい取払ったらどうか」と言われてやむなく髭をそり落したという話が素直に受け入れられるような状況が長く続きました。大学の教員の髭の方は、個性を反映する場合がありますが、皮肉な見方は、見栄はともあれ学生との区別を目立たさせる程度のものではないかというものです。官僚いじめの雰囲気の中で役所の方はますます服装は画一的になっているかもしれませんが、大学教員の方はますます多様になっています。

奇妙な人の数は、大学教員の方が少し多いかもしれません（理由は後述します）。しかし、性格的な分類では、それほど相違は無いというのが私の印象です。どこから見ても真面目な人、不真面目のようでも所詮は真面目な人、そうではない不真面目な人、説得力のある人、口下手な人、えげつない人…。おそらく分布状態は似たようなものでしょう。特に、大学を出て教育研究者、公務員になったばかりの出発点では。

- (2) 少し内容的な話になりますと、役所も大学も、出発点では、相応の学歴が前提になります。確かに、修士・博士の資格の有無という違いがありますが、国際機関等ではこれらの資格は当たり前、実質的にほとんど違いはないでしょう。むしろ、役所を含め実社会では、「博士まで行くと融通が利かない。」という批判すらあります。

仕事の緻密さという点では、大学教員の場合は、緻密という過信があります。とは言っても、官僚の仕事は一般の人が考える以上に厳しい面があります。強引な比較になるかもしれませんが、法令づくりと博士論文・専門書の仕上げ。官僚の場合、それなりの法律・条約を、極めて少数の人間が責任をもって仕上げる作業は、その後の異次元の国会対策を含めて、二本、三本の博士論文・専門書を書く以上に広汎な調査と集中力、調整を必要とする場合が多いものです。法令に係る作業は、もちろんグループ作業が中心ですが、主要国の状況調査、国内法との整合性、条文の論理構成等々、その作業と努力は並大抵のものではありません。官僚というのは、ジェネラリストとしてそういう任務をどの分野で何時負わされるか分からず待機する予備軍のようなものかもしれません。

日本の場合今でこそ議員立法が時折見受けられますが、法令の立法等は役所が主流。内閣法制局と協力しながら冷静に作業を続ける必要があります。そこでの第一読会、第二読会、第三読会という作業は、博士論文審査や専門書の審査に勝るとも劣らないものでしょう。私自身、この役所の作業の伝統は、おそらく江戸幕府以来の行政担当者の長き良き伝統ではないかと思っていますが、後輩の話ではこの伝統も少しずつ変わりつつあるということでした。

これに比べ、大学の研究調査は焦点が絞られ、個人中心のスペシャリストとしての作業の

連続。その成果も専門家同士でなければ中々分かってもらえない上に、成果の質の良否には相当の格差があるというのが実態でしょう。

他方、役所での政策推進や大学での研究業績で大きな成果がない場合でも、現在の知識・情報・サービス等の水準を維持しなければならないという、「継続」は「力」であり同時に「義務」である、という意味では、役所と大学では極めて似通っており、世間で考えられている以上に重要な位置づけになっています。

2. 基本的な相違

- (1) 官僚 (bureaucrat) と大学の教員 (professor, academician) の違いが出る基本的な背景は、おそらく、動機 (motivation) と、組織 (organization) 特に命令系統 (reporting system) ではないか、と思います。動機の相違は、おそらく社会科学の多くの分野では、官僚が現状分析と未来志向が中心となる傾向に対し、大学の教員は大半が現状から過去へ向かっての分析が中心であり若干の将来展望が付け加わるという傾向があります。

官僚の場合、公共のための奉仕が本来的にあり、自分の嗜好・考え方に合わない政策目的であってもそれに従わざるをえません。その先に高次の (?) 公益があると想定されているからです。そして、多数の利害関係者を調整していきます。その結果、一部の官僚は、その公共奉仕のモチベーションが出世や権力志向に転じやすくなっています。しかし、出る釘は打たれます。その間に、実務的かつバランスのとれた感覚がそれ相応に身についていきます。尤も、バランス感覚は何時も良いとは言いきれません。筋の通らない妥協の産物 (bureaucrats' flattery あるいは non-committal) という意味合いもあるからです。

これに比べ、大学の教員はまず自分の好奇心や知的関心が先行し、次第に理論・理屈が前面に出てきます。そして、基本的にはセルフ・コントロールのスペシャリストの世界となり、組織や命令系統の問題は二の次になります (less organized, less structured)。また、出る釘は出っぱなしの教員が多いようにも思えます。何しろ自分の仮説が最も真実に近いと考える個人主義の世界ですから。しかし、大学運営等の現実的な問題になると急に凡庸さが現われ、時として愚かな面 (professors' folly) も垣間見えます。

役所と大学のどちらが優れているかということではなく、私は、同じような人達であっても、今申し上げたような環境の違いが 50, 60 歳を越える頃までに異なる人間形成につながっているのではないかと観ています。

今から 45 年前、大学を卒業する前に、ゼミ生に大学に残ることも一案という意味で、恩師が冗談を交えて「大学教員と乞食は三日やったら止められない。」という話をしてくれました。しかし、50 歳になるまでは、そうかな? という疑問が常に残っていました。それは、元気のよかった官僚の時代には、徹底したジェネラリスト養成という環境の中で次々と社会・経済のさまざまな問題にチャレンジする魅力があったからです。新しいポストに就いたら 1 か月で担当分野をすべてマスターし 3 か月でその分野の専門家になる。日本の官僚は、長くても 2~3 年でポストが替わりましたから、「厳しさ」という点では官僚の世界には独特のものがありました。

皮肉な見方をすれば、「マゾ」的な喜びだったのかもしれませんが。良い意味で解釈すれば、そういう環境の中で広い視野を持ちバランス感覚が研ぎ澄まされていく、という楽観があった（まだある）のかもしれませんが。こういう感触はおそらく大学関係者にはなかなか理解してもらえないと思います。大学の教員は、所詮は個人主義に沿って独自の世界を形成していきます。しかし、余程の自律性がなければ安きに流れたり、独善的になったりするのは避けられません。そういう観点から数年前に外国からの来訪者に対し通り一遍で対処しようとした若い助教（授）達を厳しく問うた時には、「パワーハラスメント」になるかも、と忠告されました。

- (2) 出発点の基本的な相違は、生活様式にも差異をもたらします。組織・命令系統がはっきりしていると、まず人間関係が陰に陽に脳裏に居座ります。良い意味では、先輩・同輩・後輩の叱声・助言・支援があります。悪い意味では、上司の趣味・嗜好に左右されます。これに比べると、大学では、一部には相撲部屋のような所があり、指導教員の人間的影響が無視できない分野もあるようですが、一般的には人間関係は二の次になる個人主義。昼食も自分の研究室で一人というケースが多くなっています。

また、大学では、すべて一人でやらなければならないことを実感しました。15年前、役所を離れるときに、「これからは昔の八百屋・魚屋のオヤジのように自分で何もかもやらなければならない個人事業者になるのだぞ。」と諭（さと）されましたが、それはまずパソコンの操作と雑務の処理から実感。当然のことながら、こういう面では、家内の手伝いは全く当てにできません。

特に、大学に移動する前にPCを使いこなすようにとアドバイスされましたが、教育・調査の現場ではPCの利活用の技術は予想以上の厳しい要求。幸い、大学では最初の場合が「国際情報通信研究科」でしたから、汗と恥をかきながらも半年余でそれなりにマスターできました。後で聞いた話ですが、実際には、他の学部・研究科では、大学から配布されたPCを棚の何処かにしまい忘れた、というのんびりした教員もいたようです。また、役所にいた頃は、雑用は周りがしてくれましたが、大学では朝の準備、夜の整理等々すべて自分自身。重い荷物を持って新宿駅西口を右往左往していた頃、そこにいた自由行動のホームレスの人達をうらやましく感じたこともありました。

- (3) この他、組織・命令系統からみた環境の相違は、さまざまな所に影響しています。役所では、職務に全力投入していた数々の先輩の姿が目の前にありました。先輩・同輩・後輩から教わることも数多くありました。民間部門の人達との議論も頻繁です。これに比べ、教育研究の場では、そういう接触の機会がきわめて限られているのが実情です。「隣は何をする人ぞ」という感じです。

これは、多くの大学教員が好むと好まざるとにかかわらず研究室に入り込み、外に顔を向ける場合でもせいぜい学部・研究科、あるいは特定の学会とか狭い専門分野に限られている環境のせいでしょう。最近では、大学を超えて、公的部門を含め様々な活動に参加する大学関係者が増えています。それ自体は大事なことだと思いますが、意外にそれは短期的、そして不安定。その成果を誰が評価するのかしないのか、また、その成果を教育等にどうやって還

元するのかもしれないのか、依然として多くの課題が残っています。私の国際委員会の活動は、国際会議のハードスケジュール・緻密な議論等の雰囲気は折に触れて学生に伝えるようにしましたが、会議の内容等の教育への反映は最後まで難しい課題でした。

私が昔オックスフォード大学の留学で得た教訓の一つは、昼食・夕食とその前後の時間で専門領域の異なる者同士が常識の次元で対等に議論すること。話題のタブーは、3つ：政治・宗教・セックス。その3つ以外は、自由闊達な議論の場でした。しかし、日本の大学では、学際的・異次元的な議論は珍しく、特に素人的な率直な議論が交わされているかどうかは疑問です。皆忙しいと言えどもそれまでですが、自分自身の反省を込めて言いますと、所詮はそういう機会を作り出し育てようとする努力に乏しいのではないかと、という忸怩たる思いが残ります。かつての役所のように会食の数が多すぎたのは問題ですが、食事とお茶の時間の活用は、教員の多くが考えている以上に、教育・研究の観点からも重要なもののように思えます。

3. 人生第四コーナーの心境

役所でも、大学でも、国際活動の場でも、人間的な魅力と学識豊かな人達に出会うことができたのは、高くない報酬等ではとても説明できない貴重なものでした。今でもそういう方々には頭の下がる思いがあり、心が慰められます。尤も、率直にいえば、若い時には役所を含む実社会の方がはるかに面白かったのではないかと、ということも事実です。世俗的ビジネスの世界は、不安定過ぎるのかもしれませんが、人間臭く多面的でさまざまな人と場面に会う可能性が豊かにありました。

しかし、50歳を越えて暫くすると、ジェネラリストの自信がぐらついたというのも事実です。民間と政治が力を増し官僚の役割が相対的に後退したこと、情報通信技術革新（ICT）が急速に浮上し予想を超えるスピードと範囲で社会経済に影響し出したこと、からかもしれません。私の守備範囲だった「金融経済論」は、特にその典型でしょう。大学の教員も教科書を書くのに気後れがする、というほどの金融経済の変化でした。おそらく、理工系にしても文科系にしても、不惑の年を超え独り立ちしなければならない年齢になると、不惑どころか不安な心境に立ち戻るといったのが、もしかしたら、変化の激しい今日の世界の現実なのかもしれません。

仮にそうだとすると、この10数年は、専門分野の道を突き進んできた方々が美しく見えました。

同時に、スペシャリストの在り方には、私自身疑問が残ります。なぜか？ 私にはまだそれがよく分かりません。私が専攻した金融経済の分野では、それ自体、複雑・多様かつ怪奇なもの。スペシャリストだからといって、真実・現実が分かるには程遠い所にあるのではないかと、そうだとすれば、言い過ぎかもしれませんが、スペシャリストとジェネラリストとの相違は五十歩百歩ではなからうか。2008年のリーマン・ショックの直後にエリザベス女王が出した「金融市場の破綻は事前に誰も分らなかったの？」という率直な質問に、経済学者はすぐに答えられなかったくらいですから。

いずれにしても、これまでお世話になった大学の関係者、シンポジウムの関係者の皆様と私のきつめの教育訓練に耐えてもらった学生諸君、そしてここにおられる皆様にこれまでのご支援・ご協力を深く感謝します。そして、個人的には、その感謝と今申し上げたジェネラリストとスペシャリストを巡る疑問を持ち続けて、これから煉獄（purgatory）、これは天国（heaven）でもなければ地獄（hell）

でもなく、また、そこから帰ってきた人は誰もいないのですが、その煉獄に向かって行こうと思っています。

煉獄については、ネットで「ダンテ」、「煉獄」を同時に検索すれば、難しい説明、やさしい説明等さまざまなものがあります。それには立ち入りませんが、平たく言えば、大学の第一線を退いた後も、早稲田大学がさまざまな世代に公開している「オープン・カレッジ」にささやかながら協力すること等を通じて、最近ギャグ的に言われてきた老後における「教育（今日行く所があるの?）」と「教養（今日用事があるの?）」の問題に対処しながら、今申し上げた、ジェネラリストとスペシャリストを巡る疑問をさまざまな方々と議論していきたいと考えています。

北村 歳 治
早稲田大学国際学院（アジア太平洋研究科）教授
国際公益監視委員会ボードメンバー